

空飛ぶ貧乏騎兵隊

黒川裕子

Yuko Kurokawa

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

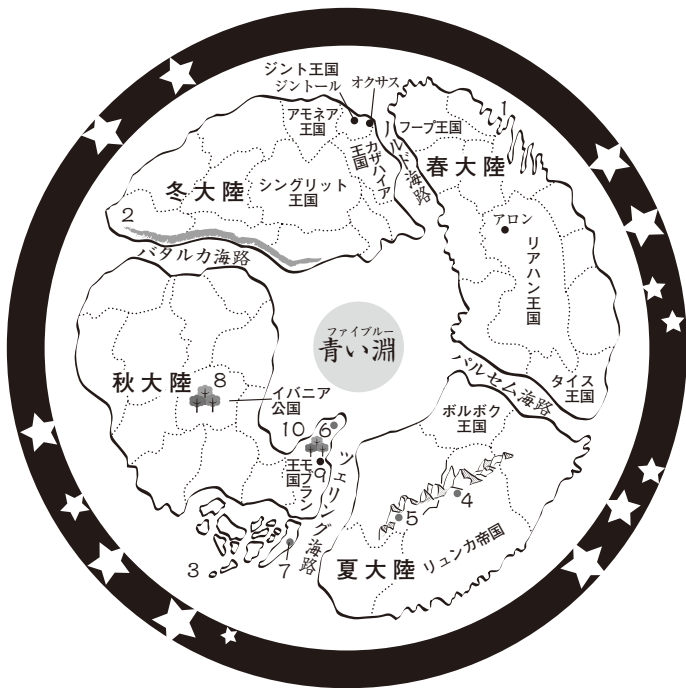
- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵
挿画

上原た壱
平面惑星

目次

序章	終わりのない輪舞を終わらせる物語のはじまり……	7
第一章	鳳凰、貧乏を笑う……	13
第二章	戦鷹に乗る王女……	46
第三章	鳳凰、諸悪の根源となる……	80
第四章	燃える水、記憶の行方……	97
幕間	サーカスの少年……	119
第五章	諸王の殿堂……	123
第六章	そいつはどこだ！……	142
第七章	戦火の匂い……	164
第八章	戦い・謎なぞ・欠けた星……	186
第九章	鳳凰、ジントの空を飛翔する……	203
終章	貧乏、鳳凰につきまとう……	234
あとがき	……	254



- | | |
|------------|----------------|
| 1. のぎり入り江 | 6. ゲイモス半島 |
| 2. ゼムの護法防壁 | 7. ミゼルの壁 |
| 3. 禁呪の島々 | 8. 永遠森
とねもり |
| 4. 竜の巣 | 9. グラブス |
| 5. リュンカ山脈 | 10. 呪言の森 |



空飛ぶ
貧乏騎兵隊

序章  終わりのない輪舞を終わらせる物語のはじまり

生者にあらず、死者にあらず、
人にあらず、獣けものにあらず。鳳凰フイインなり。

翼の手入れをしたあとは、かならず、
ひまわり油を差しましょう。

煮にえたぎる火口で、溶とけないテーブルをはさんで、
二人の兄弟が話をしていた。

時の悪魔と呼ばれる闇皇子やみおうじと、鳳凰と呼ばれる火
皇子だ。黒い宝石のような色をした頬ほおを、溶岩のつ
いた指で撫でたあと、兄の闇皇子——時の悪魔が言
った。

「渦うずができている」

「そうだな」

「世界のと真ん中に」

「知っているよ」

弟は憂鬱ゆううつそうに応える。こちらは、どんな火にも
耐えられる金属インブラの翼を持った、美しいまぼろしの鳥、
鳳凰の姿をしていた。

「おやじのやつ、また飽きてきたんだ。テーブルが
ひっくり返される時が近いぞ」

「ああ、近づいているな」

時はきた、と二人は声を合わせた。

兄は揚々と、弟はいささか気だるげに。

創造主の足下の穴ぐらで生まれた、時の悪魔と鳳
凰、二人の運命の兄弟。

仲がいいのか悪いのか、二万と八千年ものあいだ、ずっとゲームを続けている。

四つの大陸を一晚で沈めきつてしまえるほどの力を持ちながら、二人の性格は正反対だ。

時の悪魔は残忍で怒りっぽく、鳳凰のほうはいつも眠たそうで、おっとりしている。

無理難題をいってゲームを迫るのはいつも兄の時の悪魔だ。勝負に勝つたびに景気よく人間をさらって行って、時間を食い散らかす。鳳凰は、兄の食欲に辟易しながら、しかたなく勝負に応じているだけだった。すべての人間の時間が食いつくされたら——つまり、それは死に絶えるということ——それはそれでつまらないかもしれないからだ。どんなゲームをしても、ルールは一つ。

時の悪魔は、やりたいことをやる。

弟の鳳凰は、それがどんなことであれ、兄のやることをとにかく止める。なぜならば、時の悪魔のすることに善いことや、迷惑でないことは一つもまじ

っていないからだ。

「今度は何をしでかすつもりだ？」

「なあに。人間に化けて、おやじの暇つぶしを少しばかり手助けしてやるつもりさ」

世に滅びを、と時の悪魔が言った。

「どうせ、創造神の悪戯描きから生まれた世界だ。元々これほどあり得ぬものはない。塵は塵へと還してやろう」

「では私は、あなたを見つけてそれを止める」

鳳凰があくびをしながらつぶやいた。

正直、ゲームには少し飽きていた。

なにせ、二万と八千年も同じことを繰り返しているのだ。そのあいだに、二度、人間たちの世界は壊されて（つまり、穴ぐらに吸いこまれて）新しいものになった。

「でも、もう眠たいから最後のひと勝負にしよう。何でもいい。あなたにとって、もつともあり得ないものを賭けてくれ」

彼らは、彗星すいせいの尾をとじこめた宝石やら、千年に一度しか咲かない花の砂糖漬つけやら——ゲームのたびに、色々なめずらしいものを賭けてきた。

だが鳳凰は、どれもほしいと思つたことはない。父のつくる世界は、火皇子にとつて、いつも退屈だつた。しかし最後の賭けとするならば、それなりのものを賭ける価値があるだろう。

時の悪魔は鼻を鳴らす。

「そうだな。おれが生まれたとき、おやじが最初に与えたものが矜持きやうぢだ。つまり、おれの力の根つこのようなものさ。もしおれが負ければ、おれはお前の足下にひれ伏して、言うことを一つだけ何でもきこう。穴ぐらに引きこもつて、人間にも、二度とちよつかいは出さないことにする」

いつもどおりの、二人の約束。負ければ、時の悪魔は悪さをやめる。だが今度はおまけつきだ。迷惑しかかけない兄がずっと穴ぐらにいてくれれば、どれだけ静かに昼寝ができることだろう。

「どうした。時を喰くらうこのおれが、お前の気に入りの人間どもを解放してやろうというのだ。悪くない条件だろう」

「確かに」鳳凰は鷹揚おうように笑つた。「あなたのゲームにはうんざりだ。永遠に穴ぐら送りにしてやる」

「すてきな脅おどし文句ぶんぐだな。……さあ、お前は何を賭ける、兄弟。おれと同じだけ価値のあるものしろよ」

「愛を」

火口の縁にわだかまつた橙だいだい色の溶岩を舌先でなめながら、気のないそぶりで鳳凰がつぶやく。

「何だつて？」

「いつもと同じではつまらないだろう。鳳凰わたしの愛を賭けよう」

「おれを愛するのか！」

時の悪魔の周りで、ぱつと明るい火花が散つた。「すまないが、あなたに興味はない」

鳳凰はそっけない。

私が勝てば、時の兄上、あなたは穴ぐらに逆戻り。負ければ——人間に恋をする。

「いかが」

「人間。人間？」

テーブルをばんばん叩きながら、時の悪魔が、黒髪を逆立て大笑いした。

「おれたち兄弟は、創造主以外を心から愛すれば消滅する。戯れのつもりだろうが、その危険をわかっているのか」

「もつともあり得ないものを賭けると言つたら。私
が、誰かを愛することなんてあるはずがない。知つ
てるだろう。私が生まれたとき、父さんが唯一与え
なかつたものがある」

「ふふん……。このおれでも、お前の酔狂さには
呆れるぞ、穴ぐらの火皇子。長生きしすぎてお前ま
で飽いたのか。それとも本当に恋がしたいのか？」
鳳凰はきよとんとして答えた。

「いいや、別に？」

「お前はときどき、おれ以上に残酷だな」

いいだろう、と時の悪魔が笑いをおさめた。

「では、恋の呪いを」

鳳凰は、らんらんと燃える両眼を億劫そうに閉じた。時の悪魔の漆黒の指が、鳳凰の額に伸びる。額には、〈鳳凰の星〉といわれる、見事な宝玉がはめこまれている。火皇子の命の源であり、何万年にわたる叡智と力、そして記憶が宿っている宝玉だ。悪魔の指先から銀色の糸が伸びて、打ちたての鋼の色に輝く宝玉に吸いこまれていった。

闇皇子の呪いの種は埋めこまれた。

「おれが開始！と言つてからはじめて触れた人間に、お前は恋をする。お前自身が塵に還るまでな」

「いいよ、何でも」

「そつけないところは、おやじ似だな。確かに、こんなゲーム、おれたちにとっては永遠の退屈のぎでしかない。おやじが今の世界に飽きても、どうせまた別のできるだけだ。だからおれたちは急いで

いるようで急いでいない、そうだろう兄弟」

くくつと笑う。時の悪魔はおしゃべりだ。

鳳凰はもう一度あくびをした。

「そんなことはどうだっていい。それより、はじめの地点はどこがいい……」

「お前の好きにしる。おれも同じところからゲームをはじめる」

「じゃあ、冬大陸だ……あそこは昔から、なんだか好きなんだ……」

「ジントか。おれはきらいだ。いやな思い出しかなからな」

返事はなかった。鳳凰は、すでに眠りの世界に落ちかけていたからだ。うとうとと舟をこぎだす鳳凰の耳に、兄のにやついた声がささやいた。

「おれが負ければ、呪いを解いてやる。勝てばお前はそのまます人を愛し続ける。忘れるなよ、おれはお前の身近な人間に化けている。見つけだして止めてみる。じきにゲームのはじまりだ。……お前の恋人

に同情するよ。愛をしらない、おれの美しい鳥」

鳳凰はうつらうつらと夢を見はじめていた。

真つ白な雪景色が頭に浮かぶ。

あれは山だ。

冬大陸のジント城。

今はどんな人たちが、住んでいるのだろうか。

そんなことを思いながら、鳳凰はまっくらな深い眠りに落ちてゆく。夢うつつのまま、鳳凰は火口から飛びだし、翼に風をはらませて、ゆつくりと地上へと降りてゆく。

——額の星の一部分が欠けたことにも気づかずに。命の源である星が欠けたことで、鳳凰は力を失って、空中で姿勢を崩した。

いくら鳳凰でもこのままでは危険だ。だが完全に気を失う前に、風切り羽の一本を抜いて、安全なところに飛ばすのが精一杯だった。

砕けた星の欠片かけらは、彗星のようにきらきら光りな

がら、風に乗って飛んでゆく。

欠片はそのままジントへ。

風切り羽は、はるか南の灼熱しやくねつの地へ。

意識を失った本体は、突風にさらわれて、世界の真ん中の深い淵ふちに沈んでいった。

そして時は流れて――。

第一章 ● 鳳凰、貧乏を笑う

「ということ、祭礼費は打ち切りだ。悪く思うなよ、鳳騎兵隊隊長どの」

と、王宮兵団出納長は言った。仮にもジント王の十の指揮杖の最高位を預かる隊長を前にして、鏡を覗きこみ、髭を油でちよいちよいと整えている男を、モートはまじまじと見つめる。

「いま、何と」

「わからない男だね、君も」

自分は男ではありません、と言いかけて、モートは口を嚙む。女であることを思いだしてもらったところで、不吉な雲行きが変わるとも思えなかつた。

出納長は、仕上げにぴんっと髭の先をひねり上げた。

「だいいち、君のところの隊ときたら、役立たずの掃きだめではないか。やる気なし、身分なし、功績なしの三なし隊にかける祭礼費はないのだよ、モート・ハドリン。よって打ち切り」

モートは、ぱつと耳をふさいだ。出納長と、息がかかるほど間近でにらみ合う。終わりまで聞いてしまわないかぎりは、部屋を追い出されることはないからだ。

ありえない——モートはうめいた。

祭礼費がすべてなくなると言うことは、モートが率いる鳳騎兵隊にとつて、死刑宣告に等しかつた。

軍隊というものは、戦争がなければただの穀潰しだ。兵団を維持するにはたいした金がある。

傭兵なら、戦時のみ兵隊を集めればいいが、たとえ世界一の小国といえど、一国の正規軍ともなればそこいらの傭兵団とは格式がちがう。

国王の権威を損なわないために、隊に割り振られた予算のなかで、身だしなみにまで気をつかわなければならぬ。

腕章一つにだって、各隊の財布の中身が露骨にあられる。モートは耳をふさいだまま、悲しげに自分の二の腕を見下ろした。名誉あるジント王軍第一分隊——鳳騎兵隊。

その腕章は、モートが自分で繕っているせいで、見るも悲惨なありさまだ。

途中で黒い糸がなくなつたため黒の布地に一部灰色の糸が使われており、しかも縫い跡はよたつており、金のない分隊の悲哀とモートの縫製の技術が如実にあらわれている。

靴屋の娘に生まれて二十五年にもなりながら、モートの縫い物の腕前は壊滅的だった。

モート——モティファール・ハドリンはジントの首都ジントール、ガド通りのしがない靴屋の亭主キース・ハドリンと、今は亡き母親とのあいだに生まれた。

ほんの四年前まで、モートが父親の店を継いで靴屋になることは、竜蜥蜴がネロール甲虫を好んで喰うこと、戦鷹がリユンカ山脈のあちら側に存在しないのと同じくらい確かなことだった。

男と同じように短く切つた、目立たないこげ茶色の髪に、緑がかつた灰色の瞳。鼻にはうすいそばかすまで浮いており、みっともないことうずらの卵模様も同然だ。こめかみには、縦に走つた古い切り傷まである。背の高さもあいまつて、こうして騎士の格好をしていけば、誰も女とは思ひもしない。

別に隠していないのに気づかれないのだから、男ばかりの軍隊のなか、便利と喜ぶべきか悲しむべきなのか。現に出納長も、モートが女であることを知らないか、忘れているにちがひなかった。

モート・ハドリンが、第一分隊の隊長に任せられたのは、ただ一つの功績によってである。

四年前のある寒い朝、ガド通りを、鳥におどろいた馬が暴走していた。馬はジント王妃を乗せた馬車を曳いていた。それを止めたのが、寝ぼけ眼で店の前を掃除していたモートだった。実際には、とっさに投げたエプロンが、馬の頭の目に覆いかぶさって、二度びっくりした馬が足を止めただけだったのだが。

御者台の従卒二人が吹っ飛ばされて怪我をしたにもかかわらず、かすり傷一つなかった王妃は、ここにこ笑って、ただの町娘にすぎなかったモートの首根っこを掴んだ。

そして、

「出世したいでしょ？ ね！ 前任がやめたところだから、ちょうどいいわ。あらあなた、女の子なのね。でも女の子が鳳騎兵になれないって法律はないしね。え、名前は？ モーティファール、あら綺麗、

お姫様の名前ね。でも大丈夫、ぱつと見には男の子だから。あたくしが陛下に言っておくから、明日から城においでなさい。ね！」

という、王妃のおそろしくいい加減な「ね！」の連発で、この苦境に引きずりこまれた。

確かに誰も文句は言わなかったし、それどころか新しい鳳騎兵隊長長ことはジントールの食卓の話題にものぼらなかつた。

そのくらい、鳳騎兵隊というのはジントにおいて、無意味で存在価値のないものである。

理由はただ一つ——この国にはもう、鳳凰はない。

春夏秋冬の四大陸。

そのうちの冬大陸にあるジントで語り継がれる、嘘のような伝説だ。

かつてジントには鳳凰がいた。

鳳凰は、四季大陸でもっとも強く、神秘的な生きものだ。夏大陸の大帝国リユンカの悪名高き飛竜の

群れも、春大陸のリアハン王国が誇る戦鷹部隊シリルボードウエインも、一頭の鳳凰にかなわない。

鳳凰は死なない、脈打つ心臓がないからだ。

代わりに、額には燃える宝玉〈鳳凰の星〉がおさめられており、その神威によって動く。死者でも生者でもない神獣、創造主の子供ともいわれる。

生者にあらず、死者にあらず、人にあらず、獣にあらず——鳳凰なり。

創造主の爪、溶けることも砕けることもない太古の金属インブラでできているという、からだ。

鳳凰は鳥の姿をしているながら、言葉をしゃべり、妙なる詩歌をうたう。鳳凰の星がめぐらせる神威をたぐつて口から吐き出される炎は、伝説の魔の蛇へびを呑みこんで、一国の領土を半日で焼き払うことができるといふ。

大昔、ジントには確かに王が最強の鳳凰に騎乗して四季大陸全土を支配していた栄光の時代があった。無限の力を持つ鳳凰と空を飛んだ、鳳騎兵の伝説だ。

だが鳳凰は、ジントの空から消えてしまった。理由は伝わっていない。突然、鳳凰はジントを去り、そして二度と戻ってこなかった。

鳳凰と勇壮な鳳騎兵隊は誰も信じないお伽噺とげばなしと化し、ジントは四季大陸どころか冬大陸のお荷物となりさがり、二千年後の今、こういうことわざになって、夕飯時のジント人の口に上る。

——ジントで役に立たぬもの二つ、雪かきの箒ほうきと鳳騎兵隊。

名誉職とはたてまえで、その隊長は完全なる閑職しやくだ。ほかの分隊とちがって、都の守護をするでもなく、国境警備の任に就くわけでもない。

今や冬大陸のおみそ、世界最弱小国といわれ、財政難が続くジント王国で、そんな鳳騎兵隊が存続しているだけでも奇跡である。

平民の女が隊長にすえられたところで、誰も気にならないというわけだった。

ばちんと勢いのよい音を立てて薪まきが爆はぜた。

真冬のヘーゼルの月だ。

この時期の冬大陸では、暖炉がなければ一晩で凍え死んでしまう。寒がりという噂の出納長のために、室内は春大陸のように暖められている。なんと豪勢なのだろう。追加の薪を買えずに、王宮総務局からの支給品の薪をさらに四つに割って使っている鳳騎兵隊とは大違いだ。確か、鳳騎兵隊の隊舎には、あと一束しか暖炉用の薪がなかった。

モートは必死で食いがつた。

「出納長どの。繰り返しお訊ねしますが、鳳騎兵隊の祭礼費が今年度からまったく、一ダレルもなくなると、そういうことでありますか」

出納長は、引き出しから小さな銚を取りだし、今度は鼻毛の手入れにかかった。

「ダレルどころか、五分銅だつてやらんよ。完全にただ飯喰らいなのだから、仕方なからう。春大陸との交易問題のせいで、現在わが国の台所事情が厳しいことは、鈍い君でも知っているだろう。あの財

務長官が、君たち鳳騎兵隊の撤廃を進言しないだけ、ありがたいと思うべきだよ、モート・ハドリン」

鼻毛のついた銚を、ぐいっと突きだす。

モートはそれを避けながら言葉につまった。彼女が指揮する分隊が、ただ飯喰らい、王軍のお荷物以外の何ものでもないことは、事実であるからだ。

なのにジント国王ハロスが鳳騎兵隊を潰してしまわないのは、ひとえに、伝統を打ち破る気力のない呑気さの賜だった。

手をかえ品をかえて、まだ食いがつた。

「しかし、祭礼費がなくては、剣の鞘一つ新調できません」

「君たちの鞘だ。私の鞘ではない。だいいち、何をそうむきになってる？ 鞘だろうが下着だろうが、古いものを使いたまえ、身の程知らずの貧乏部隊！ それがわかれば、いやわからなくとも退出！ さよなら！」

めぼしい鼻毛をやつつけたらしい出納長が、余分

な頬の肉をつまみながら面倒そうに答える。

「その古いものすらないのだ！」

と、モートは心のなかで転がり回った。

祭礼費をあてにして、全員の羽根つき兜かぶとと自分の剣まで、質に入れてしまった。借りた金で食料を買いこみ、とつくに隊員たちの腹のなかだ。

春までに金を納めなければ、一振りしかない剣が売り飛ばされてしまう。その上、三年に一度の国王の練兵式の当日、ほかの華々しい分隊の最後尾を、剣のない隊長と羽根つき兜なしの騎兵たちが物もらい同然についてゆくことになるのだ。紋章もんしょうが消えるほどつぎはぎだらけになったマントで！

いかに呑気な国王でも、そんなありさまの鳳騎兵隊を見て廃止を考えない保証はどこにもない。

（困ったことになった。これはどこからか、金を調達しなければならぬぞ）

きりきりと胃が痛む。

練兵式はひと月後、マグノリアの月にある。それ

までに必ず羽つき兜と裏地が赤の紋章入りマント、そして新しい剣の鞘を手に入れなければならない。

出納長が鼻をならした。

「そもそも、君たちが剣を使う機会がいったい、いつあるのかね。包丁を山羊やまぎの皮袋で包んで腰からぶらさげていても、誰も気づかんよ」

「包丁を入れたら、山羊の皮袋が切れてしまいます」真面目な顔でモートが言い返した。

「冗談だよ、ハドリン。あいかわらず、君には通じんな」

出納長は唇を歪ゆがめ、肥えた顎肉あごにくのあいだに埋もれた汗をぬぐった。

冗談にしては面白くなかったが、モート・ハドリンはこれからのことを憂うれえた。

三年前の練兵式にはマントがなかったが、つてを頼って何とか安価で借りられた。だがぐだんの貸しもの屋は、半年前に潰れている。

今年こそは、去年一生懸命やりくりして貯めた金

に今年度の祭礼費を足して、思い切つて衣装を新調しようと思つていたのに――。

アドリ鳥の羽を使った最高級品のように華美なものではないが、一般祭礼用の銀鳥の羽つき兜なら、全隊員分ものを揃えられるはずだった。願わくば新しい剣の鞘といつしよに。

「とにかくハドリン隊長、そういうことだから。悪く思わんでくれよ」

出納長は、扉の真鍮しんちゆうの取っ手を見た。今度こそ話は終わり、の合図だ。どうかもう一度財務長官にかけあつてもらえないだろうかと口を開きかけたとき、次の客が扉を開けて入つてきた。

「おや、まだお話し中でしたか。これは失礼を」

雄アドリ鳥の立派な羽飾りを深青のマントにあしらつて、いかにも良家の若騎兵といった風情の、第二分隊――通称王騎兵隊――の隊長ジグマール・ファスだった。モートを見るなり、整つた顔に微笑を浮かべ、友好的かつ優雅に会釈をする。

高名な貴族の跡継ぎなのに、謙虚けんきよな好青年である。モートはあいまいに笑い返した。

鳳騎兵隊とちがつて、王騎兵隊が資金ぐりに困ることは、百年経つてもないだろう。国いちばんの精鋭分隊であり、王都守護の要かなめでもある。分隊のなかで、固有に隊名をささずかっているのは、モートの第一分隊と第二分隊の二つだけだ。「鳳」騎兵隊と「王」騎兵隊、たった一語ちがうだけで、この差である。

出納長は、モートとそう歳としの変わらないファス相手に、いかにも一目置いているといったふうに相手を崩した。

「ようこそ、ファスどの。財務長官からのお達しをお伝えします。今年度の祭礼費、王騎兵隊あてには、昨年度より五万ダレル多い二十三万ダレルが明日の午後を支払われます。手続きには、隊長と隊主計官の二人で来て下さい。蠟印ろういんのための紋章指輪を忘れずに」

「承りました。国王・王妃両陛下のご慈悲じひに感謝い

たします」

—— 祭礼費だけで、二十三万ダレルときたものだ。うちの隊の、給金の総額より多いではないか。

モートは、今にもよだれが出そうな唇を無意識にぬぐった。

そのいじましいようすを、王騎兵隊の隊長が親しみのこもった微笑を浮かべながら見つめている。

「お久しぶりですハドリンどの。秋の兵団会議では、実に貴重なご示唆をいただきまして」

「示唆といいますと」

「あれ以来、うちのやつは、あの油で梳かさないと機嫌が悪いのです」

ははあ、とモートはますますあいまいに笑う。

ファスの愛馬—— 純白の馬。白は洗う手間が余分にかかるのに—— の尻尾を格好良く梳かしつけるのに有用な練り油を、休憩時間にちよいと教えてやったのだった。

万能練り油の販売は、モートの細々した副業の一

つだった。叔父が営んでいる油脂屋から、売れ残りのくちばし油を安く買い、女が髪につける葉草をまぜただけのインチキ同然の代物だが、思ったよりも好評で卸し問屋が定期的に買ってくれる。

原価はただ同然の練り油を五分銅で売るので、薪代くらいはでる。

四つの油壺の代金として二十テイレルを受け取った罪悪感を思いだしつつ、モートは、おもむろにファスに向き直ってじつと見上げた。

「何か？」

なぜか、狼狽えたように目を逸らされる。分隊長の中には、いまだにモートが女であることを知らない者もある。ファスは知っているのだろうか。

ほかの九つの分隊で同じ調査をして、この第二分隊で最後だ。

「王騎兵隊長どの。参考までにお教えいただきたいことがあるのですが」

「はい？」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。